

下仁田ジオパーク

下仁田地域の特異な地質は、日本列島を 1,000km にわたって貫く大断層の北東端に位置していることに起因している。断層は、太平洋の構造プレートがアジア大陸を運ぶ構造プレートの下を押している線に沿っています。下仁田では、何百万年にもわたる地殻変動により、海洋プレートの一部が青岩と呼ばれる川沿いの岩の形で表面に浮かび上がってきました。これらの岩石は、南牧川と青倉川の合流点にあるこれらの岩は、2 億 5000 万〜3 億年前の深海火山の噴火によってできたものです。膨大な圧力が岩石にかかったことで、岩石が緻密になり、独特の青色を呈するようになりました。

何百万年にもわたる地殻の隆起により、海洋プレートの褶曲が地表に押し出され、そこで風と水によって侵食され、青岩が露出しました。また、南牧川と鐺川の両岸の数カ所では、海底だった頃にサンゴや貝殻が石灰化してできた石灰質の堆積物などの若い岩盤が侵食されて露出しているのが見られます。

2 つの川の土砂のレベルが異なり、水の透明度に明確な違いを作っています。南牧川が鐺川に流れ込む青い岩の近くでは、特にコントラストが際立っています。

侵食によって青岩の南に山のような地層の連鎖を生み出しました。地質学者は、これらの地層をクリッペ、または根のない山と呼びます。数千年に及ぶ風と水の影響で、かつて青い岩を含むはるかに古い土地を覆っていた数百メートルの厚さの土地の大部分が失われた後に残っているのです。侵食は低地にも影響を与えています。下仁田を流れる鐺川は、他の地域も長い年月をかけて侵食し、町の中心部より下の谷間に自然の段丘を刻んできました。

下仁田の西部を占める特徴的な山の景観は、700 万年から 1000 万年前の火山活動によって形成されたものです。妙義山は、7 つのゴツゴツとした岩の尖塔の総称で、この山脈の一部です。これらのピークは、長い年月死火山の火口が侵食された跡です。考古学的な証拠は、日本の初期の人類がこの風景を不思議で神聖なものとな見なしていたことを示しています。

荒船山付近の急峻な山腹に玄武岩が転落したことで知られています。寒冷時には玉石の隙間に集まった降水が凍ります。氷から上がってきた冷気が斜面を下り、斜面の足元の開口部から流れ出ます。この現象は、20 世紀初頭の電気冷蔵以前の時代に、蚕の卵の自然冷蔵に利用されていたものです。荒船風穴と名付けられ、世界遺産に登録されています。

下仁田ジオパークは、43 のジオパークの 1 つです。